第13回12/20　「デュアルＦＭステーション　ＦＭ８０２の戦略と最近のラジオ事情」

栗花落 光（つゆり・ひかる）先生　　**株式会社 FM802　代表取締役社長**

1948 年　京都市生まれ。

同志社大学経済学部卒業後、

ラジオ大阪（大阪放送株式会社）入社。

報道部　放送記者を経て、制作部で音楽番組中心に担当。

1988 年　株式会社 FM802 に開局メンバーとして参加。

編成部長、専務取締役を経て、現在代表取締役社長。

【参考ホームページ】・funky802.com　・cocolo.jp　・radiko.jp

《講義概要》

株式会社ＦM802 の代表取締役社長としてメディア業界の最前線でその発展に尽力する栗花落光氏が、ＦM802 の戦略と最近のラジオ事情について講義を行った。

講義はまず、産業社会学部の教授でＦM802 番組審議委員長である坂田謙司先生の挨拶から始まり、様々なメディアが変革している中で今一番ホットなメディアであるラジオの魅力を知り、新しいメディアとしてラジオの世界を学んで欲しいと伝えた。続いて栗花落氏により、ラジオの歴史やアメリカのラジオ事情、ＦM802 のコンセプトについて説明後、「ヘビーローテーション」という独自の戦略によってラジオからヒット曲を生み出し、ラジオの影響力を音楽マーケットに示したビジネス戦略について詳しく解説。ポリシーやこだわりを貫き、ラジオだから伝えられる音楽シーンを大切にしたビジネス展開が重要であることを示した。また、2012 年より開始した初の１局２波体制について、導入した経緯や新たなビジネスモデルについて紹介するとともに、今後の更なる発展と可能性を提示した。

さらに、ラジオ産業の新たな試みであるインターネットラジオやデジタルラジオ、定額制 NET ラジオサービスの概要や現状について解説。音楽の楽しみ方が多種多様になる中で、ラジオを聴く設備環境を整えるだけでなく、ラジオが若い世代にとって楽しめるコンテンツになることが大きな目標であり、ラジオの魅力を実感してもらうためにイベントを積極的に実施し、音楽を聴いてもらうきっかけを作ることが重要であると言及した。学生はラジオの魅力を再認識し、ラジオ産業の今後のあり方と可能性について見つめ直す機会となった。

《受講生の感想》

●こだわりを持ってそれを貫き続けておられる姿勢に感銘を受けます。情報技術やそれに伴う社会の変化によりラジオだけでなく様々なコンテンツのあり方が変化してきました。そうした中で基本的な考え方を曲げることなく時代に対応しようと努力されている姿は他の業種においても学ばなくてはいけないことなのではないかと感じました。変化をポジティブに捉え、いかにプラスにしていくかという考え方が必要だと改めて感じました。　立命館大学・産業社会学部・4回生

●ラジオ業界の現状や課題がはっきりと感じることができた。ラジオにはラジオの良さがあり、テレビにはない独特の感覚、感性がある。FM802 のプライド、信念などがここまでのシェアを占めている理由であり、ラジオ業界だけでなく、社会全般に、かたくなな信念を持つことが大切だと言える。時代の流れに柔軟性を持って対応する力と信念とがうまく調和、調整されてこそ、自分の持っている力が最大限に発揮されるのではないかと感じた。　立命館大学・法学部・3回生

●流行の曲を流さないという姿勢は視聴者にとって新たな音楽と出会う場として機能するため、日本の音楽の多様性を活かす素晴らしいものだと感じた。災害時の活躍のように、ラジオの新たな可能性が開けてきているのでマスメディアとは一味違う独自の立場を構築して魅力的なメディアになっていくと思う。

立命館大学・産業社会学部・2回生

●今日はラジオの成り立ちや、現在のラジオについてお話していただき、ラジオの多様化を感じ、すごく興味を持ちました。そして FM802 の音楽の重要視する方針やコンセプト、その意志をとても感じることができました。他にはないポリシーを持って続けることが、ラジオだけで言えることだけでなく、他の分野でも通じて言える、必要であり、大事なことなのかなと思いました。　立命館大学・映像学部・3回生

●ヘビーローテーションを用いてラジオからヒット曲を生み出し､音楽シーンを作り上げていく手助けをし、現在はテレビではカバーできない多様に広がった音楽シーンをラジオでは提供し、若い世代を中心に番組や音楽が構成されていることが今日の講義を聞いて強く感じました。ラジオは「マスメディア」ではなく､「クラスメディア」である。パーソナルメディアとの間にあるべきであると仰っていたことが非常に印象深く、これからのラジオのあり方であるように感じました。

立命館大学・映像学部・4回生

●ラジオは時代とともに変化しているということを改めて感じました。災害に強いこともあり、エンタテインメントだけでなく、情報発信などなくてはならないメディアの存在であるには変わらないと思います。ラジオだからこそできるということを理解し、他のメディアとの両立ができるようにするにはどうすればいいのか考えていきたいと思います。